短期派遣 EUROPA　派遣報告書

博士後期課程一年　桑山佳子

派遣先：チューリッヒ大学（受入教員：ダニエラ・タン）

派遣期間：2012 年３月 20 日から 2013 年２月 14 日まで

研究テーマ：トランスレーション・スタディーズの視点からの多和田葉子研究

派遣の概要

今回の派遣では、トランスレーション・スタディーズにおける異化翻訳の理論と多和田葉子の作品にみられる翻訳思想とを関連づけることが目標であった。翻訳 研究の主要な論点のひとつである翻訳の異化／同化をめぐる議論では、オリジナルの言語的・文化的違和感を訳文から極力排除する（同化）、あるいは意図的・ 戦略的に訳文に残すこと（異化）が検討される。報告者はこれまでの研究で同化翻訳が翻訳される先の言語（目標言語）でどのような効果を持ちえ、どのように 目標言語それ自体に影響を及ぼすのかを考察してきた。今回の研究では、異化翻訳について多和田葉子の作品を対象にしながら考察をすすめた。東京生まれの作家多和田葉子は現在ドイツ語と日本語で執筆活動を行っており、どちらの言語圏においても当地の言語で執筆されたオリジナルの作品を発表し続けている。彼女の作品にはそれが単一の言語で書かれたオリジナルの作品であっても、 両方の言語圏からの影響が認められる。報告者は、こうした多和田葉子の作品にみられる異化翻訳的な要素に注目し、さらに彼女の言語および翻訳思想と異化翻訳的要素の連関をどのように論じることができるかを考えていた。

まず、ドイツ語圏と日本語圏のあいだで起きる異化の分析のため、今回の派遣ではドイツ語圏からみた日本文学あるいは日本語テクストへの視点を備えること、 指導教員との面談を通して最終目的である博士論文の構造について話し合いながら文献の読解を進めることが目的のひとつだった。このために、受入教員との二 週に一回程度の定期的な面談で多和田葉子の博士論文“Spielzeug und Sprachmagie“の読解を進めながら、報告者自身の博士論文の内容と方向性を探っていった。日本語環境からみたドイツ語、ドイツ語環境からみた日本語の両方に配慮するため、発表や聴衆としての学会参加を通してドイツ語圏日本学の議論に積極的に触れた。

研究成果

今回の派遣での大きな成果のひとつは、博士論文の構想がより具体的になったことが挙げられる。このことについては、口頭発表と研究ノートを通じてその都度 発表している（2012 年６月、ドイツ語圏日本古典文学研究会ワークショップ「翻訳」及び 2012 年 11 月、ヒルデスハイム ITP 国際セミナー、研究 ノート「多和田葉子作品における文字−『飛魂』

『ボルドーの義兄』を中心に−（東京外国語大学ドイツ語学・文学研究会、2013 年秋刊行予定）。

二つ目の成果として挙げられるのは、東京外国語大学とチューリッヒ大学間での共同学位（博士）取得への基盤ができたことである。当初スイスでの研究活動は この派遣の期間である約 11 ヶ月のみの予定であったが、今回の派遣を通じて得られた成果を鑑み、また両大学の指導教員のすすめもあり、派遣終了後は両大学 に正式に在籍して最終的に共同学位（博士）取得をめざすことになった。

上記二つの成果に加えて、ドイツ語運用能力の向上がみられたことも成果に挙げられる。まとまった期間でのドイツ語圏滞在は初めての経験であり、語学面でも大きな成長がみられた。出発前にはスイスドイツ語との関連でこの点がやや不安であったが、大学の特に授業ではスイスドイツ語が使われることはあまりなく、結果的に大きな問題はなく、ドイツ語運用能力の向上がみられたと感じている。

今後の課題

前項で述べたように、派遣当初に比べると報告者のドイツ語運用能力は著しく向上したといえる。しかし、ドイツ語での議論に際して聞き手のネイティヴとしての理解力に頼ってしまうことが多く、論文執筆や学会発表のためには単数または複数のネイティヴチェックを必要としている。報告者の博士論文はドイツ語での 執筆を予定しており、この能力を身につけることは喫緊かつ必要不可欠な課題である。

また、今回の派遣では既にある程度多和田や日本語について理解のある、ドイツ語圏の日本学の聴衆にむけた発表が多かった。今後は、日本語特有の問題などに まったく前知識のない聴衆、ドイツ文学や翻訳研究の研究者などに向けて発表し、どのように受け取られるのかを知ることも目標であり課題でもある。

最後に、今後の最終目標は博士論文の執筆である。今回の派遣では自分の研究テーマや問題意識について、より明確化することができた。この成果をもとに、着実に博士論文の執筆を行いたい。